

第4章 金ヶ崎周辺エリアの機能計画

1. 敷地の概要

(1) 現況

- 金ヶ崎周辺エリアは、現在のムゼウムが存在する金ヶ崎緑地の他、港湾関連用地や交通機能用地、都市機能用地等、様々な用途の土地が混在している。

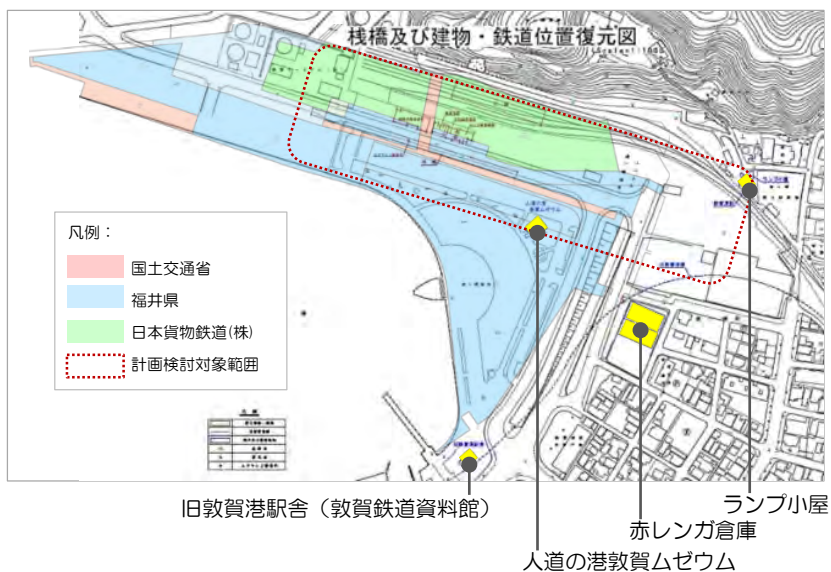
図：敦賀港港湾計画図



(2) 土地所有区分

- 金ヶ崎緑地をはじめとする海岸線に面する土地は、そのほとんどを福井県が所有している。休止している敦賀港線の敷地は日本貨物鉄道(株)が所有している他、一部の区画を国土交通省が所有している。

図：公図転写連続図



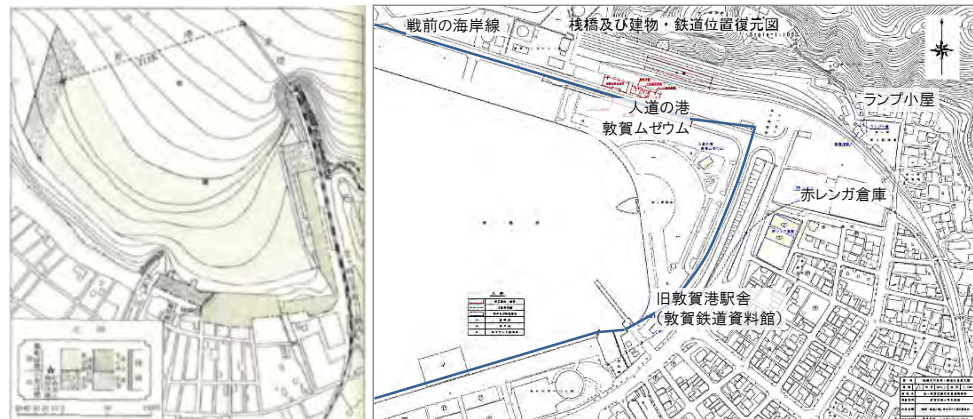
(3) 海岸線の変化

- 敦賀港は時代の要請に伴い、幾度か修築を繰り返している。金ヶ崎周辺エリアが最も華やかだった、明治後期～昭和初期のノスタルジックな景観は、大正2(1913)年に竣工した第一期港湾修築工事、昭和7(1932)年に竣工した第二期港湾修築工事によるもの。
- その後、埋め立てや防波堤の延長が繰り返され、平成11(1999)年の敦賀港開港100周年を記念する港湾整備事業の、金ヶ崎緑地の整備や港湾施設拡大に伴う埋め立てにより、金ヶ崎周辺エリアの景観は大きく変貌した。

写真:大正時代の第一期港湾修築工事を終えた敦賀港(左)。現在の敦賀港(右)とは大きく景観が異なる。

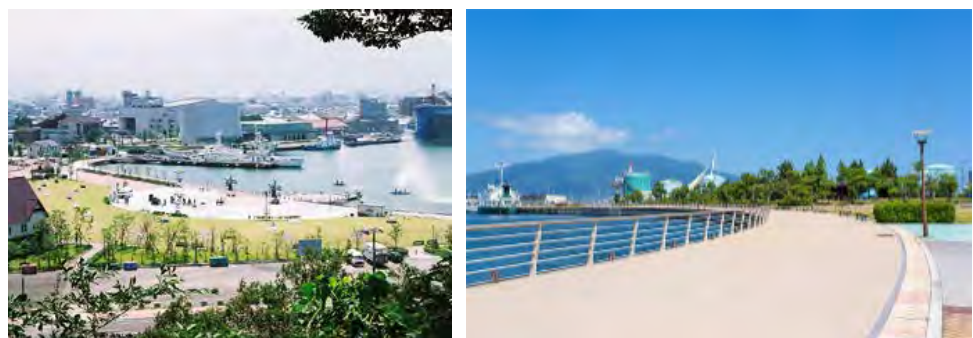


図:第一期港湾修築図(左)と現在(右)の比較。金ヶ崎緑地により戦前の海岸線は失われている。



出典:敦賀市史 通史編下巻

写真:現在の金ヶ崎緑地



2. 整備方針

古き良き雰囲気の中で、平和と博愛を考える場の提供

(1) 金ヶ崎周辺エリア全体の整備方針

課題

- 広大な立ち入り禁止区域が存在するとともに、海岸線の変化により、古き良き敦賀のイメージが見えない。
- 各資源が点として存在し、金ヶ崎を巡るしかけに乏しい。

- エリア全体を市民が気軽に利用できるようにする。
- エリア内の既存資源を活かし、それらの間を楽しく散策できるようにする。
- 周辺との一体的な整備により景観を整えていく。
- 古き良き敦賀を可視化するため、失われた建築物・建造物等を復元する。
- エリア内に、ボランティアや市民団体等の活動拠点となる機能を設ける。
- バスや乗用車の駐車場を確保して、市民や観光客の利便性を高める。

(2) ムゼウムの整備方針

課題

- 実物資料や情報が少なく、メッセージを伝えるコンテンツが不足。
- 団体利用等、利用者を受け入れるスペースの不足。
- 保存、調査のスペースや体制の不足。

- 平和と博愛を考える場の中心的な存在として、展示や教育普及等、十分な事業活動ができる規模を検討する。
- 学習旅行等、団体観光客を十分に受け入れられるように移転拡充する。
- 赤レンガ倉庫や鉄道資料館等、金ヶ崎周辺エリア内の既存施設と役割分担し、相乗効果を生み出せるようにする。

(3) 鉄道遺産の整備方針

課題

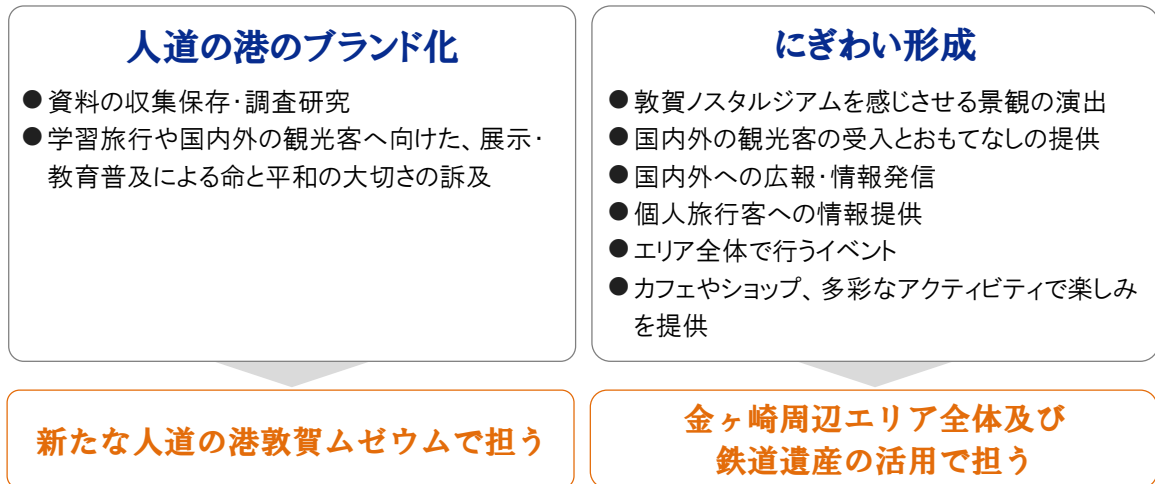
- エリア内の資源は手つかずの状態。面的な整備が必要。
- 転車台や導入車輛等、新たに導入する遺産の活用。
- 市内外の資源を回遊してもらいしきみの不足。

- ランプ小屋や軌道等、エリア内の敦賀港線の既存設備を有効活用する。
- かつて敦賀駅に存在していた転車台の活用や、車輛展示も検討する。
- 敦賀駅からエリアまでの敦賀港線の活用を検討し、エリアから市内への回遊性を生み出す。
- 眼鏡橋や旧北陸本線トンネル群等、市内外の鉄道遺産と連携できるようにする。

3. 金ヶ崎周辺エリアに必要な機能

にぎわい形成とともに、人道の港のブランド化

(1) 機能の役割分担



- 金ヶ崎周辺エリアが本市の新たなシンボルエリアとして、本市観光の中心的な役割を担うためには、「人道の港」ブランドを確立・拡充して本市ならではの事業を実施し、新たなにぎわいを形成していくことが必要となる。
- 従って、新たなムゼウムが「人道の港」ブランドの情報の受発信の役割を担いながら、金ヶ崎周辺エリア全体の活用で新たなにぎわいの形成を担っていく。

(2) 基本的な考え方

- 市民が日常的に集い、遊び、憩える場として整備し、にぎわいを形成する。
- 多彩なイベントや四季折々の変化を楽しめる等、一年を通じて何度でも訪れたくなるようにする。
- 誰でも等しく利用できるよう、ユニバーサルデザイン※を導入（バリアフリー・多言語等）。
- 安全に安心して利用できるように、エリア内の視認性をはじめ、防犯・防災機能を高める。
- 施設整備や修景等、エリアを面的に整備することにより、これまで感覚的に遠かった資源間に連続性を持たせ、一体感を感じられるようにする。
- 見やすくわかりやすいサインを充実させ、エリア内の回遊性を向上させる。
- 各資源の役割分担を明確にして、必要最小限で高い効果を得られるようにする。

※ユニバーサルデザイン：文化・言語・国籍の違い、老若男女といった差異、障がい・能力の如何を問わずに利用することができる施設・製品・情報の設計（デザイン）。

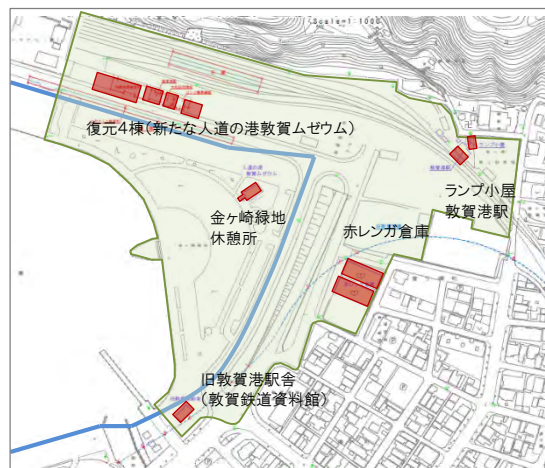
4. 機能配置 (案)

周辺の既存資源と一体的に整備し回遊性を高める

(1) 基本的な考え方

- 復元4棟を、新たなムゼウムとして整備する。
- 既存の金ヶ崎緑地や赤レンガ倉庫を含め、個々の施設をつなぐしかけや、新たな鉄道遺産の活用等により、金ヶ崎周辺エリアを面的に整備して一体感を形成する。

図：機能配置 (案)



- 一体感を形成することにより、各資源がつながる。エリア全体で利用者の回遊性が高まる。

図：整備後の回遊性の高まり



- 新たなムゼウム (復元4棟) をはじめ、各資源を中心に区画ごとに特徴を出し、それぞれの区画が役割分担して回遊性をさらに高める。

図：区画ごとに特徴を出し、役割分担で回遊性を高める



5. 区画ごとの機能（案）

（1）憩う・くつろぐ

① エントランスの役割

- 一体的に整備された金ヶ崎周辺エリアの導入の役割を担う。

写真：統一された案内サインを整備して導入からわかりやすく（岐阜県：関ヶ原古戦場）



② 駐車場の確保

- 訪れる利用者の利便性を確保するため、自家用車やバスの駐車場を可能な限り確保する。

写真：緑地は憩いやくつろぎの場として現状維持



③ 緑地の継続利用

- 既存の緑地は現状を維持し、市民や観光客の憩いやくつろぎの場として利用していく。

写真：相談デスクや多言語のパンフ等より利便性を提供（左：敦賀駅観光案内所・右：京都総合観光案内所）



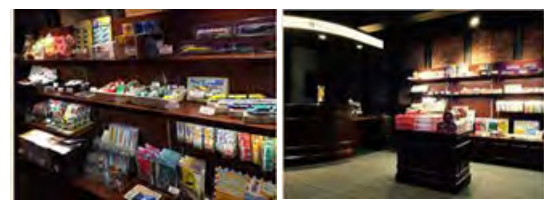
④ 金ヶ崎緑地休憩所に必要な機能

- 利用者がいつでも無料でくつろげる、休憩機能や便益機能。
- 金ヶ崎周辺エリア全体を利用者が安全に安心して利用してもらうための管理機能。
- エントランスの役割を果たすための総合案内所。
- エリア全体の諸事業をサポートできる、ボランティアの拠点機能。

写真：エリア内で行われる様々な事業のサポートを実施（観光クルーズ船のボランティア）



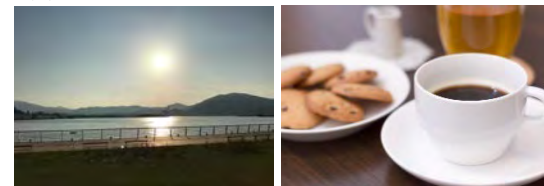
写真：赤レンガ倉庫のショップ



⑤ カフェ・ショップ等の誘致

- 金ヶ崎周辺エリアを周遊する市民や観光客に、憩いやくつろぎを提供する他、買い物の楽しみを提供するため、民間資本の誘致を前提にカフェ・ショップ等の整備を図る。
- 赤レンガ倉庫の機能と重複しないように、メニューに配慮する他、ミュージアムショップ的な役割を担う等、商品構成等を検討していく。

写真：海が見えるカフェ等を誘致

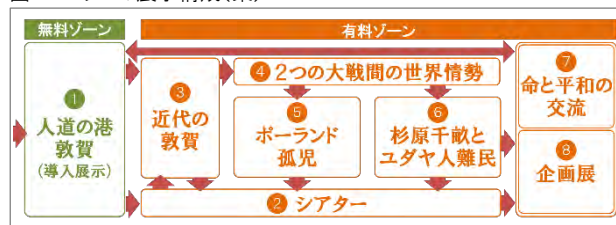


(2) 学ぶ

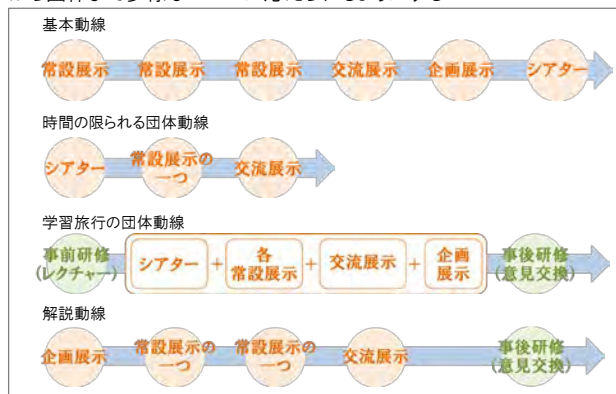
① 復元4棟（新たな人道の港敦賀ムゼウム）

- 金ヶ崎周辺整備構想で示された、「敦賀ノスタルジウム」を感じさせる景観を形成するとともに、ムゼウム機能を拡充移転する。
- 展示は基本的に、よりわかりやすく丁寧に、敦賀で起きた出来事を伝える。
- 団体利用や学習利用に対応できるようにして、修学旅行等の誘致を目指していく。

図：ムゼウムの展示構成(案)



図：ムゼウムの利用パターン(案)：様々な見学パターンを設定し、個人から団体まで多様なニーズに応えられるようにする



② 旧敦賀港駅舎（現：敦賀鉄道資料館）

- 旧敦賀港駅舎は、当面は鉄道資料館の機能を活かして継続利用し、展示資料を充実させて引き続き敦賀の鉄道史を紹介していく。

写真：旧敦賀港駅舎の展示は再編整理し、当面はランプ小屋区画との棲み分けを図っていく

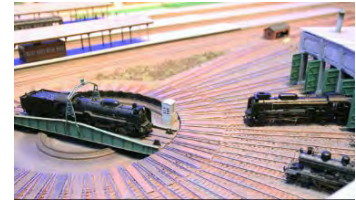


(3) 体験する

① 敦賀港駅舎（日本貨物鉄道(株)所有）

- 現在、日本貨物鉄道(株)が所有する敦賀港駅舎は修復し、ランプ小屋と併せて鉄道遺産を展示する場として活用を検討していく。

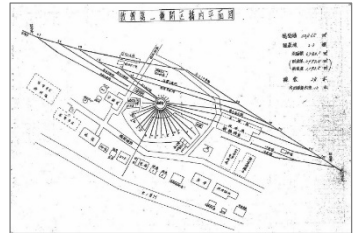
写真：赤レンガ倉庫のノスタルジ
オラマの1シーン



② 転車台の活用

- かつて敦賀駅に存在し、現在は福井県が保管する転車台は、県と協議しながら設置場所や活用方策を検討する。

図：敦賀第一機関区構内平面図

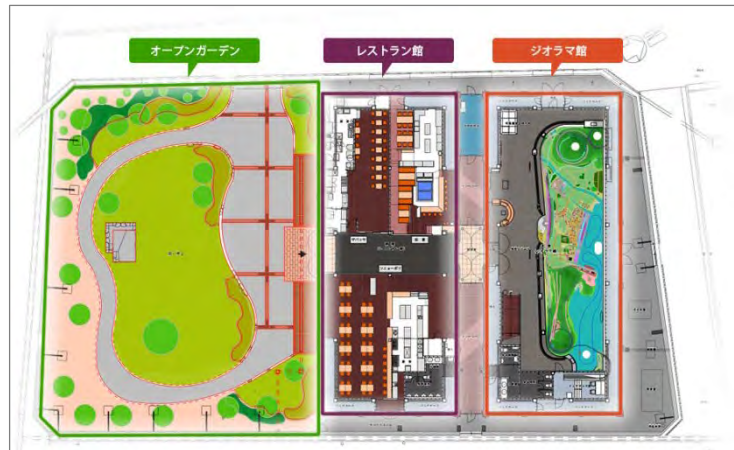


(4) 憩う・体験する

① 赤レンガ倉庫

- エリア全体との連携による相乗効果で市民や観光客の利用を促進し、より一層のにぎわいと交流を形成していく。

図：赤レンガ倉庫平面レイアウト



写真：左よりオープンガーデン、レストラン館、ジオラマ館



(5) エリア全体で展開する事業

① 屋外の演出

- 復元4棟を中心とした景観の再現に留まるが、将来的には、視界に広がる範囲全体が「敦賀ノスタルジアム」を感じさせる景観の再現を目指していく。
- 既存のモニュメント等を活かしつつ、ランドマークとなる印象的な建造物や、新たなモニュメントを設置する等、様々な方策でフォトジェニック（写真映え）な名所を構築する。
- インスタグラムやツイッター等、SNSでムゼウムや金ヶ崎周辺エリアが国内外に拡散していくことを目指す。

景観の復元や多彩なアクティビティの提供で、金ヶ崎周辺エリアを国内外へ拡散(例)



- 復元4棟を中心に、将来的には視界に広がる範囲全体が基本構想のコンセプト「敦賀ノスタルジアム」を感じさせる景観の再現を目指す。
- 5インチゲージのSL等、家族で楽しめるアクティビティを提供する。



「人道の港」を可視化する屋外モニュメント(例)



命のピザのスタンプを模したモニュメントとスギハラサバイバーの人名リスト



ポーランド孤児を温かく迎え入れた敦賀市民の気持ちを飴玉（ガラス玉）で表現



ユダヤ人難民を運んだ天草丸

ユダヤ人上陸の地モニュメント(案)

- 欧州から逃れ、リトアニアで手に入れた「命のピザ」によってやっとの思いで敦賀にたどり着いたユダヤ人の気持ちと、温かく迎え入れた敦賀の人たちの気持ちを顕彰する。
- ユダヤ人上陸地点に、命のピザのスタンプを模したモニュメントとスギハラサバイバーの人名リストを設置。リストは更新できるようにする。
- 現ムゼウム横に設置されている「自由への扉」や植樹等、既存の設置物も引き続き活かし、人道の港のストーリー形成の一翼を担っていく。



ポーランド孤児救済モニュメント(案)

- シベリアでポーランド孤児が、飢えと寒さにさいなまれる中、日本人が手を差し伸べて救った事実と、衣服を与えられた孤児たちの袖に、お菓子をいっぱい入れてくれた敦賀の人たちの温かい気持ちを顕彰する。
- 敦賀の人たちがくれた飴玉をモチーフに、カラフルなガラス工芸等によって子どもたちにも親しみやすくする。

汽船のモニュメント(案)

- 上陸地点に「天草丸けふ五時入港ユダヤ人350名を乗せて」等、当時の報道にあるような情景を、モニュメント等で表現。
- ポーランド孤児やユダヤ人難民が大陸から汽船によって敦賀に逃れてきたことを直接的に訴求する。

② 視点場の演出

- 植栽やカラー舗装等によって復元4棟以外の建造物や棧橋、接岸していた船舶を表現する等、金崎宮や鷗ヶ崎から見下ろすと明治後期から昭和初期の敦賀港の姿がわかるような視点場からの演出も考慮し、エリアの回遊性をより一層促す。



写真：金崎宮から見た戦前の敦賀港

③ 四季折々の変化を楽しめる

- 年間を通して何度も市民や観光客に訪れてもらうため、季節に応じたアクティビティ（遊び・体験）の提供や、四季折々の景観の形成により、金ヶ崎周辺エリアで四季の変化が感じられるようにするとともに、いつでも何度でも楽しめるようにする。



④ 日常的なイベント

- 例えば、定期的な朝市（マルシェ）の開催等、「金ヶ崎と言えば！」と言われるような日常的なイベントを開催する。
- 民間と連携し、飲食のケータリングサービスが日常的に提供できる等、市民や観光客が気軽に利用できるようにする。

⑤ 非日常的なイベント

- つるが鉄道フェスティバルやミライエに加え、多彩な非日常的なイベントも展開し、金ヶ崎周辺エリアではいくつものイベントが行われていることを、国内外に広めていく。

6. 新たに入手する鉄道遺産の活用

- 長年に渡って大阪と札幌間を結び、多くの人に親しまれた「トワイライトエクスプレス」は、平成27(2015)年に運行を終了した。
- 牽引車の「EF81型電気機関車」は、敦賀地域鉄道部の所属車両で、本市に縁が深い。このことから、西日本旅客鉄道(株)と本市はトワイライトエクスプレスの部品譲渡に関する協定を締結した※。
- また、かつて小浜線で運行し、本市に縁の深い「キハ28形気動車」の購入を決定した。
- これら新たに入手する鉄道遺産は、金ヶ崎周辺エリアの話題性を高められるよう、その活用策を検討していく。

※車輛本体はアスベストが付着しているため、譲渡は法的に困難。

写真：トワイライトエクスプレスの牽引車と車内の調度品、つるが鉄道フェスティバルのキハ28形気動車



7. 周辺の鉄道遺産・港湾遺産との連携

- 眼鏡橋や旧北陸本線トンネル群等、敦賀市内の遺産を巡るツアー等により、敦賀駅や金ヶ崎周辺エリアを基点にして市内の回遊性を高める。
- 福井方面や、長浜方面、若狭方面の鉄道遺産と連携した、広域イベント等も今後検討していく。

図：回遊性の向上のイメージ

